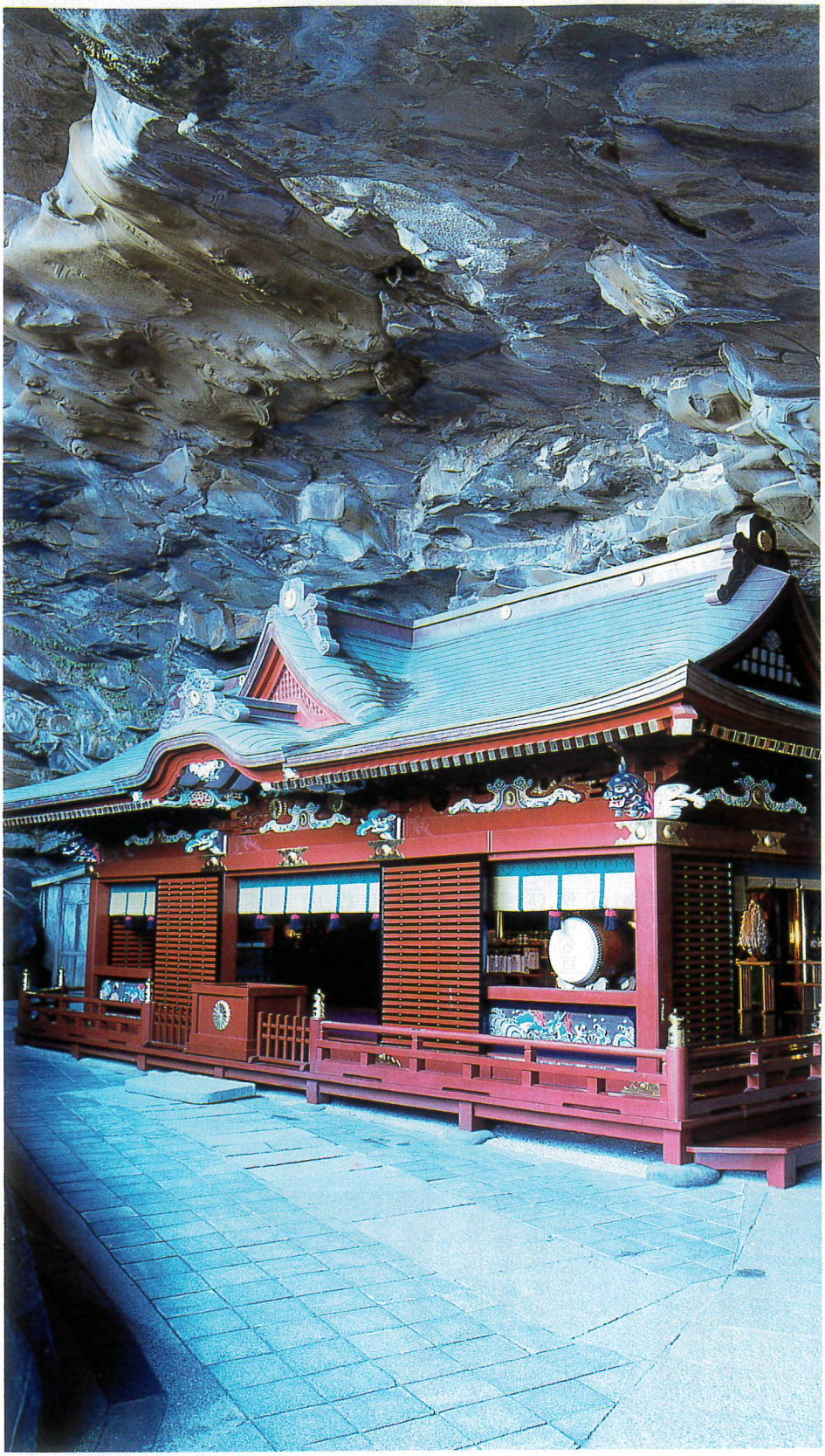


鵜戸

発行者兼編集者
鵜戸神宮
社務所
印刷所
西日本印刷

暑中お見舞い申し上げます

御挨拶

宮司　杉田秀清

平成十年七月一日付をもって、第十代の鵜戸神宮の宮司を拝命致しました。

七月二日神社本庁での工藤総長よりの辞令交付後、神社本庁の方と宮内庁に参向し、「就任の御挨拶」をいたしまして、記帳簿に記帳し帰宮いたしました。

尚、七月三日には、鵜戸神宮の大前に宮司就任奉告祭を斎行しました。大前にぬかづき、この重責を身の引き締る思いで受け、日を経るごと責務の重さを痛感しております。

省りみますと、天皇陛下御即位十年のこの佳年、思いもかけず四月一日、権宮司にとのことで、赴任以来、身に余る光栄と思いながら、佐師前宮司様や神職、職員又氏子の皆様に支えられながら、「神明奉仕を第一」としながらも、数々の史跡を有し、風光明媚な鵜戸の地を愛で、鶯が鳴くのを楽しみ、潮騒の音に驚きながら、樹林の風の音に自然いっぱいのこの地を気に入って、過ごしてまいりました。しかしその間に、六月九日大雨のさなか、参道の崩壊にあい、又自然の持つ計り知れない力も味わいました。これから皆一丸となって立派な参道への復旧を推進して行かなければと堅く思っています。

もとより浅学菲才の身ではございますが、この様な大役はまことに責任重大です。歴代の宮司様の残された功績を汚すことなく、この上は御神威を畏み、ますます精励努力し、誠意をつくして弥益々、御社頭の興隆発展に盡力する覚悟です。

皆様の御支援、御協力を賜りつつ人の和を計りながら重責を全うしたいと思います。何とぞ御指導、御鞭撻を賜りますようお願い申し上げ、御挨拶といたします。

退任挨拶

佐師朝規

光陰矢の如しと申します通り、五十年振りに帰郷致し旧官幣大社鵜戸神宮に奉仕致しまして早くも十五年を経ました。

顧り見ますれば昭和五十八年、各界の要請をうけまして当時の新聞にも記載され報道されました如く職務の重大さに困惑致しましたが、明治以前に祖父が初め僧侶としてのちに神職として奉仕し、亦兄も奉仕していましたし、妻の父は五十年にも亘り奉仕致しましたので、之は祖先の御招きであり御神威による事と有難く拝受する事に致しました。

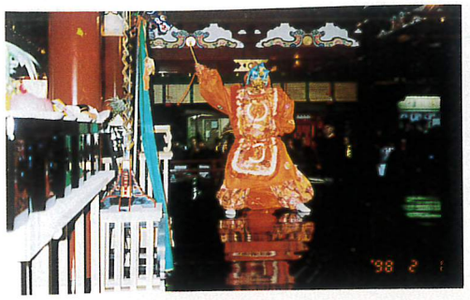
皆様方には大変お世話になりましたが、特に責任役員、氏子、崇敬者総代の方々には絶大なる御協力を賜り、昭和四十三年の御改修より二十九年目の平成九年の御本殿の大改修を始め、斎館建設、三百台収容の大駐車場の整備、各末社の修復等、数々の事業が滞り無く完成致しました事に有難く厚く御礼を申し上げます。

又、行政機関を始め各界の御協力を得まして御本殿が県の指定文化財となりました。これによって建物自体の保存に一役を担って永久に維持できることになるだろうと期待も大きくふくらみ安堵しています。

行事としては、シャンシャン馬道中唄全国大会、シャンシャン馬の花嫁姿の鵜戸詣り再現等が、多数の参加を得て実現できましたことに鵜戸さんの名も全国に流布することになり得たのではないかと、ある程度自負も致しております。この様に十五年間の思い出は走馬燈の様に懸け巡りますが、之も偏に皆様方の御支援の賜と深く感謝致しております。

この度、長年御世話になりました故郷をあとに京都にて余生を送る所存でございます。各位の御健勝と御多幸を祈念致し退任の挨拶と致します。長い間有難うございました。

例祭斎行と奉祝行事



二月一日午前十一時より、献幣使鬼塚武之進氏（県神社庁副庁長）御参向の下、例祭が厳粛且つ盛大裡に斎行された。

当日は生憎の雨となったが、責任役員、氏子・崇敬者総代を始め、四神宮（英彦山、霧島、鹿児島、宮崎）宮司、県内外神社宮司、官公衙関係、日南市、北郷町、南郷町の各地区々長、全国各地の崇敬者等多数の参列を賜った。

祭典には、舞楽"蘭陵王"が奉納され厳かな中にも華やかさをかもし出していた。又、福岡藩伝　柳生新影流兵法　第十四代宗家　長岡鎮廣氏他によって四方払い、小太刀組太刀、活人剣組太刀、杖術組太刀が奉納され、鋭い気合いと共に行われる演武に参拝者も息をころして見入っていた。

奉祝行事として、第四十五回剣法発祥地鵜戸山顕彰剣道大会が開催されたが、雨天の為、会場を日南市の多目的体育館に移し、一二七チーム、約一一〇〇名が出場。終日熱戦が繰り広げられ、鋭いかけ声と歓声が体育館に響きわたっていた。

好天に恵まれた二月八日には、第二十六回鵜戸神宮奉納四半的弓道大会が、儀式殿前広場にて開催され、和やかな雰囲気の中で競技が行われた。

尚、剣道大会、四半的大会の成績は次の通り。

（敬称略）

〔剣道大会〕

〔団体〕

▽一般

①県警機動隊（宮崎市）②宮崎産業経営大学（宮崎市）③北郷町（北郷町）ひむか少年剣道クラブ（日向市）

▽高校

①宮崎北（宮崎市）②宮崎工業（同）福島（串間市）

▽中学

①稲門館（延岡市）②五十市（都城市）③陵武館（国富町）竜鳳館（佐土原町）

▽小学

①稲門館（延岡市）②修道館（同）③振徳館（日南市）神武館（宮崎市）

〔女子個人〕

▽高校・一般

①山本満美（日南市）②田口佳代（宮崎北）③平嶋エリ（延岡学園）川越明美（宮崎日大高）

▽中学

①領家麻奈美（都城市）②内門美由紀（延岡市）③河野美久（串間市）佐藤奈津子（川南町）

▽小学校六年

①後藤翠（延岡市）②長友香織（高岡町）③藤木千春（宮崎市）長野裕美（同）

▽小学校五年

①深江香代（串間市）②伊東恵（延岡市）③後藤香奈江（同）領家麻里絵（都城市）

▽小学校四年

①中島有紀子（日南市）②益田優香里（都城市）③倉永久美（新富町）山口友香（串間市）

〔四半的大会〕

〔団体〕

①中里1（都城市）②南郷かつお（日南市）③日向1（日向市）

〔個人〕

▽男子

①石川誠喜（都城市）②財津至啓（宮崎市）③黒木博（日南市）

▽女子

①野崎ハツ子（田野町）②今井由貴子（南郷町）③木上マツエ（山之口町）

祈年祭斎行

年のはじめにあたって穀物の豊穣を祈るとともに国家の安泰を祈る祈年祭が、二月十七日厳粛に斎行された。

当日は、午前十一時より責任役員、氏子・崇敬者総代を始め多数の参列を賜り、宮司以下祭員によって奉仕され、宮司祝詞奏上の後、「浦安の舞」が奉納された。日本の文化は、米作を中心とする農耕文化を基盤として成立しており、日本人にとっては大切な祭りである。

第十二回シャンシャン馬道中唄全国大会開催
シャン馬道中再現

昭和三十年に作曲されて以来、愛唱されてきた「シャンシャン馬道中唄」の第十二回全国大会が三月二十八日・二十九日の両日開催された。

初日は、日南市文化センターで予選が行われ、県内はもとより遠くは兵庫県などから五五八名の参加があった。二日目は、会場を鵜戸神宮儀式殿に移し、決勝が行われ予選を勝ち抜いた一六四名が、少年、成・青年、壮年、実年、高年、寿年の部門に分かれて競い合い、各部の優勝者の中からグランドチャンピオンが選ばれた。

会場には、民謡愛好家や参拝者で埋まり、出場者が声高らかに張りのある声で、「鵜戸さん参りは春三月よ…」と熱唱し、唄の終わる度に大きな拍手が送られていた。

各部の入賞者は次の通り。（敬称略）

▽少年の部①黒木美佳（西都市）②林美智子（南郷町）③東郷祐佳（宮崎市）
▽成・青年の部①市木美年子（鹿児島県）②児玉恵子（宮崎市）③久嶋みさち（日南市）
▽壮年の部①中田智保子（日向市）②花岡清子（延岡市）③浜砂重子（西都市）
▽実年の部①木下信子（串間市）②村山利夫（宮崎市）③崎村ミサヲ（南郷町）
▽高年の部①高野照子（宮崎市）②阿久根マツ子（鹿児島県）③林悦子（日南市）
▽寿年の部①鈴木敬（延岡市）②柳田成美（北郷村）③吉村利子（宮崎市）
▽グランドチャンピオン成・青年の部　市木美年子

又、同大会に合わせて当地方の風習であった、シャンシャン馬道中の鵜戸さん詣りが今年も再現された。今回初めて台湾にも呼びかけ、国内十八組、台湾六十二組の応募者の中から、松木宏幸・秋香夫妻（神奈川県）、井辺浩司・優子夫妻（長崎県）、張世昌・朱敏娥夫妻（台湾）が選ばれ、本殿にて正式参拝の後、花嫁が乗った馬の手綱を花婿が引いて境内を一周した。

参拝者も、単衣の着物、手甲、脚絆、草鞋ばきという出で立ちの新婚さんにカメラを向けたり、一緒に記念撮影をする姿が見受けられた。

別当宮司先賢慰霊祭

当神宮特殊神事の一つとされ、神仏合同の慰霊祭として位置づけられている別当宮司先賢慰霊祭が、五月二十五日午前十一時より、歴代別当宮司遺族を始め多数の参列を賜り、厳かに斎行された。

宮司祝詞奏上の後、願成就寺住職　川崎光俊氏外僧侶一名により経が奏上され、御詠歌の法要、玉串拝礼と執り行われた。

大祓式斎行

私たちの日常生活において、知らず知らずのうちに犯した罪や穢を祓い去る大祓式が、六月三十日午後四時より多数の参列を賜り斎行された。

この後、無病息災を祈る為、「茅の輪くぐり」の神事が行われ、「水無月の夏越しの祓いする人は千歳の命のぶというなり」と宮司以下参列者全員で唱えながら、茅の輪を三回くぐった。

防火訓練

一月二十六日の「文化財文化デー」に先立ち、一月二十一日に当神宮自衛消防団と日南消防署との合同防火訓練が行われた。

文化財文化デーは、昭和二十四年一月二十六日、世界最古の木造建築の法隆寺金堂壁画焼失の反省に立ち、文化財保護と防火管理の意識を高めるために、昭和三十年に定められた。

当日は朝から青空が広がり穏やかな一日となり午前十一時、儀式殿厨房から出火の想定で行われた。自動火災報知器が作動すると、全職員が自分の持ち場に駆けつけ、各所の消火栓から放水が始まった。数分後、日南消防署の消防車が到着し消火活動を開始、本番さながらの訓練が行われた。

又、消火器の取り扱い方や、天ぷら油、灯油等での消火の訓練を受けた。

責任役員氏子総代改選

五月一日氏子総代会、五月六日崇敬者総代会を開催し、任期満了に伴う責任役員の改選を行った。

尚、氏子総代もこれに先立ち各地区に於いて総会が開かれ改選が行われた。

その結果、左記の方々が選ばれ委嘱式が行われた。任期はそれぞれ三年である。

記

平成十年六月一日
責任役員を委嘱します。
田中　静、植野　章一、山崎　勝、横山　忠男、鬼束　達朗、波越　重利、和田　晧、津田　宗治

平成十年五月一日
氏子総代を委嘱します。
竹山　真次、後藤　満儀、長友　治義、川瀬　力丸、江口　義雄、松浦　秀夫、関屋寿美男、森　今朝生、竹山　三士、岩田　義信、湯浅　勝好、水元　福美

参道山側斜面崩落

梅雨に入り、本格的な雨のシーズンとなった六月九日午後九時頃、千鳥橋から休憩所の間の山手側斜面が幅約五〇メートル、高さ約五〇メートルが崩落。土砂は千鳥橋の欄干を押し倒し、本殿に続く幅四メートルの参道をふさいだ。

参道には約三〇〇立方メートル、全体的な崩落は約六二〇〇立方メートルと見られ、崩落により建物に対する被害はなかったが、参拝者が御本殿にお参り出来なくなった為、神門に遥拝所を設けて対応していた。

しかし、早急に仮復旧に向け工事が進められた結果、山側に土のうを積み上げ、参道の幅三メートルが整備でき、七月十二日より参拝できるようになった。

本格工事に着工すると、八月末か九月上旬の二週間ぐらいは参拝できない見込みである。

完全復旧には、本年末を予定している。

これほどの崩落は、「鵜戸の宮居」の記録によると、文政八年（一八二五年）今から一七三年前、風水害により仁王楼門が海中まで押し流されたとあり、それ以来かと思われる。

参道復旧工事につき御協賛のお願い

此の度の参道山手側斜面の崩落に伴い、一日も早く御本殿に参拝が出来る様、参道の復旧をめざし工事が進められています。

就きましては、皆様方の心暖まる御協賛をお願い申し上げます。

参道復旧協賛者芳名

（平成十年六月十五日～七月十四日）
参拝記帳者のみ（敬称略）

野塚静由貴　竹之山光広　鎌田　優子　前田　清　原田　良一　和田　通子　伸和建設㈱　松本準四郎　南川嘉一郎　千頭　修　向井　正紀　宮下三枝子　糀谷　榮一　姫野　節子　米谷　二郎　今野　吉男　久保　桂子　志満　一善　平下　与平　太田　龍子　浦　丘四郎　廣畑正四郎　廣畑　欽一　和田　菊技　鈴木　要　坂田　速子　孫　夢興　長　清隆

三島　武夫　四方千鶴子　深作　久男　牛嶋　瑛治　林　仁俊　倉橋　貞一　加藤　六朗　西　裕佳里　村田　淳一　今田佳代子　㈱本田謙工機　相良　輝幸　森山　和雄　吉永　利夫　甲斐千恵子　井上喜久男　井上スミオ　山中スナオ　河辺　正子　美藤　雅夫　村田　学紀　松葉口　清　黒嶋喜久男　清水　幸子　小又　叔子　平山　和子　竹内　良江　安達　智照　伊藤冨美代

高橋　千香　川口　文子　角田　妙子　池部　安文　盛武しげみ　煙草　晴美　島　勝彦　森　祐一　郷　博子　新里　安弘　廣瀬　文男　辻　岑夫　竹本　幸治　昆　清次　安田　敏雄　細谷　義昭　酒井禮次郎　小西美術工藝社　南那珂支部　㈱　湊　梅田　安人　黒嶋喜久男　岡　種比古　長谷川晃世　梶　富士雄　永田辰三郎　大野　浅夫　鷲山　渡

坂田　徹　網野ふみ子　内田　勇雄　髙塚　市治　長谷川久良　前野　英俊　村上保三郎　並木マサ江　藤坂　長嗣　渡辺　武弘　金子　和恵　江原　市雄　三雲　勝美　石井傅次郎　山塚　澄雄　小島　一成　藤崎　義治　逢坂　耕造　関山　久子　前島　佐久　山家　文美　多胡　文夫　塩谷　種市　留髙　照幸　松本泰三郎　柳町　善郎　茂木　重利　三次　芳夫　田村　昇子　小野　保　浦川　芳宣　鏑木つね子

中田　勝昭　原口　昇　笠原　久稔　江口　卯　金川　眞二　大和龍太郎　髙橋　季治　高桑　ミツ　佐藤　芳隆　塩原　輝昭　西村　重代　清水　重久　桜井　安治　中沢　俊郎　佐々木ちか　森下　幸子　黒木　政秋　佐藤　健治　坂本　勝志　米山　礼子　緒方　俊亮　藤巻　武一　岩川　恭子　篠原　義人　杉山　勇　三宅　一郎　三島八寿夫　福井福太郎　長崎　末子　松田　行雄　関口　金次　小杉　千里

寺田　明　古屋　義宗　石原　富造　丹羽　登　各務　秋雄　岡田　好司　肥田　清　田辺　剛造　中井　仙一　高木　志津　佐藤　宗雄　橋本　信夫　大西　義夫　吉田　友則　吉田　幸子　大森光之輔　伊藤　努　堅田　豊　堅田　敦子　増田　伝三　小池　安男　小野　海　出水　忠利　出水カズ子　馬場　孝雄　日野　直次　高木　朗　桃瀬　英　大橋　良子　山内　温　山内　春江　佐藤　久髙

横山　豊　宮川登志司　錫谷　光男　大木　貞一　大竹　務　田村　義雄　中山　圭一　澤田　眞一　磯田清五郎　二見　保　糀　友康　副田　滋　谷口　繁子　後藤　幸弘　煙草　冨広　宮崎　サト　安田　久夫　御手洗義一　橋口　功　牛島タマ子　土持　畩盛　大西　満典　谷口　一男　大西　市郎　久保　久冨　鈴木　雅喜　落合　節子　北川三子男　熊谷国太郎　猪狩禎治郎　明石　和人　田中　玉喜

井上　功久　原口　鐵也　松本　浩治　中谷　茂昌　中谷サツエ　松田　徳生　福盛　吉秋　栗原　京子　大塚　菊雄　甲斐　光男　中原　正則　簗瀬　常雄　萩野　嘉子　野中　一正　上村　節朗　㈱桐野建設　増田　次郎　堺　勇芳　久我　久吉　生田　宗宏　平山ヒトミ　古田　敬治　村上　次昭　照山　信也　福田　艶子　山口　弘子　小野　美香　吉田　慧　中西富美子　小高　智子　石川　久子　井島三枝子　原　宣之　勝利　宣之

南　ミ　榎木田幸子　小野　正　春田　勲　中村　利房　酒井　康廣　久保　時夫　前川　幸良　中山　迅　河内　克典　佐藤　治雄　杉浦　富治　山下　義夫　細田　勇　小崎　隆　河野　豊信　増田　耕作　尾上　嘉延　松田シゲミ　松田登志子　八木　学　中西　永吉　奥田　忠雄　龍　明年　松村　馨　成清　博義　髙本　康夫　深水敬二郎　野田　辰起　東郷　清彦　井形　孝子　金丸　治良

平元　文　林　チエ　境　ヒロ　村山雄次郎　松野　昌治　白坂　利雄　上久保三夫　武良千代司　楠本　義秋　黒木　常好　三輪　房治　河野　國夫　黒木　久栄　小倉　茂子　布施　英男　土井　芳雄　増田　耕作　遠矢　繁光　薬師寺ヒサ子　薬師寺テル子　薬師寺政弘　板井　哲男　植木　葉子　植木　龍典　板井　松男　板井　久江　三田　祥子　植木　勝子　永楽　順子　綱木　国彦　平島　智月　堤　良広　中嶋　直子

藤木　勝　松元　義男　山田　輝人　髙松　邦子　平原　力　古賀才知子　山浦　暢　栗原　清　田中　信雄　津留造酒夫　豊住　治雄　植木　三平　日野雄次郎　藤田サワ子　原田　寅雄　南村　寒司　松浦　京子　小城　須美　坂本　繁友　平田一二三　井本　由美　海老原良一　島田　拓美　広瀬　朝

山元　絹代　川内　嘉治　真木　昭　原田　路子　山北　和男　朝田　則子　阿部　久男　小柳　陽子　永野　満夫　永尾　賢二　金田喜右衛門　小出　啓一　堀田　芳枝　田川　初一　生　槙江　浦川　藤吉　松浦　京子　小城　須美　坂本　繁友　平田一二三　井本　由美　海老原良一　島田　拓美　広瀬　朝

鵜戸稲荷神社 鳥居奉納

豊年満作、漁業、商売繁盛の守護神として信仰が厚い鵜戸稲荷神社に品原和雄氏、藤浦久敏氏、藤浦森吉氏、藤浦末弘氏四名により鳥居が奉納された。

奉告祭は天候に恵まれた、六月七日午前十一時より宮司をはじめ奉納者参列の下厳粛に斎行された。

いさみ太鼓奉納

昨夜来の雨は上がったものの、今にも泣き出しそうな空模様となった五月五日の「こどもの日」。

揃いの鉢巻、法被姿の地元も子供たち五十名が「いさみ太鼓」を奉納し、鵜戸の大神様と祖先の恩とに感謝すると共に、無病息災を祈願した。

参拝者も、子供たちが元気に打つ太鼓、これに合わせて勇壮に舞う子供獅子に盛んに拍手を送っていた。

表彰

五月二十日、明治神宮参集殿に於いて、責任役員田中静氏が功労顕著な者として神社本庁より表彰された。

これは永年の功績が認められたものであり、当宮としても大変光栄なことである。

辞令

鵜戸神宮宮司　佐師　朝規
神職身分特級とする
神社本庁（二月三日）

鵜戸神宮宮司　佐師　朝規
願いに依り本職を免ずる
神社本庁（六月三十日）

鵜戸神宮権宮司　杉田　秀清
鵜戸神宮宮司に任ずる
神社本庁（七月一日）

新職員紹介

出仕　磯野英志
生年月日
昭和五十二年十月二十三日
最終学歴
國學院大學別科
趣味　車
常の信条　一生懸命

巫子　酒井みゆき
生年月日
昭和五十四年二月二十日
最終学歴
日南高等学校
趣味　映画鑑賞
常の信条　前向き

巫子　濱田人美
生年月日
昭和五十五年二月十五日
最終学歴
日南農林高等学校
趣味　裁縫、読書
常の信条　思いやり

巫子　米衛里佳
生年月日
昭和五十四年四月二十二日
最終学歴
日南学園高等学校
趣味　読書
常の信条　笑顔

巫子　磯崎希代佳
生年月日
昭和五十四年七月二十四日
最終学歴
日南農林高等学校
趣味　音楽鑑賞
常の信条　思いやりの心